

2022年1月30日 主日礼拝

説教題「こんな石ころからでも」ルカによる福音書 3 章 7～22 節

主任牧師 加藤 誠

「悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」(ルカ 3 章 8 節)

主イエスは 30 歳ごろに公に伝道を始められましたが、それまではナザレの村で両親のもとで育ち、父ヨセフの大工の仕事を引き継ぎます。そして 12 歳でエルサレム神殿に両親と家族みんなで出かけた時、「わたしの父の仕事に仕える」という神さまからの召命を深く意識するようになった聖書箇所を二週間前の礼拝で読みましたが、その礼拝後、一人の方が映画『ベン・ハー』の冒頭にこんな場面がありますと教えてくださいました。老ヨセフが大工仕事をしていると、ナザレの村人がやってきて「息子はどこに行った？また仕事を怠けているのか？」と尋ねるとヨセフが「父親の仕事をすると言って山に出かけたよ」と答えます。すると村人は「父親の仕事？それならどうしてここにいないんだ？」と怪訝そうな顔をして去っていき、ヨセフはまた黙って大工の仕事に戻る場面です。もちろん聖書にこのような場面はありませんが、12 歳にして「わたしの父の仕事」すなわち「神さまからいただいた召命」を深く意識するようになった息子をどう取り扱ったらいいのか、戸惑いながらも静かに見守る父親ヨセフの姿をよく描いたシーンだと思いました。

12 歳の時から 30 歳の時まで、約 18 年間、主イエスは「父である神さまの仕事にどう仕えていくのか」を考え続けたことでしょう。改めて考えてみると 18 年間というのはずいぶんと長いなあと思いました。12 歳で天の神さまを「わたしの父」と深く意識し、エルサレムの律法学者たちと議論するほど聖書の知識においても優れていた。いわば天才肌の早熟の少年です。当時は一般に 20 歳までに男は結婚したようですが、主イエスが結婚された形跡はない。天才肌の早熟の少年ならば、16 歳くらいで「わたしの父の仕事をする」と言って家を出て行ってもよさそうなものを、30 歳ごろまで独身を通しながら大工をし、家族と一緒に暮らしているのです。その間「ヨセフ家の長男が結婚しないなど、何事か！」というプレッシャーも受けたことでしょう。そのように想像を巡らすと、この 18 年間は主イエスが迷いながら、考え続けながら、荒れ野に出ては祈りを重ねられた期間だったと思うのです。迷ったり、考え続けたり、なかなか行動に移せない、そういう期間を私たちはあまり評価できないのですが、「迷い続け、考え続け、祈り続けること」は決して消極的な事ではない。深く深く神さまの御旨に近づいていくためには大切な期間なのです。この「迷い、考え、祈り続けた 18 年間」があったから、30 歳以降の 3 年間に主イエスは激しいほどの情熱を注いで行動していかれたのではないのでしょうか。

そして 30 歳にして「神さまの時」を確信して主イエスが立ち上がる契機となったのが、ヨハネの始めた「悔い改めのバプテスマ」でした。「悔い改め」とは、心も体も神さまに向けて方向転換すること。そしてヨルダン川に身体を沈めるのです。

ところが当時、バプテスマは異邦人（異教徒）がユダヤ教に改宗する時にするものであって、ユダヤ人がバプテスマを受けるなど、ありえないことでした。アブラハムの子孫としてすでに選ばれているのだから、今さら神さまに方向転換する必要などないと皆考えていたわけです。けれどもその人々に「我々の父はアブラハムだなどという考えを起すな。神はこんな石ころからでもアブラハムの子を造り出すことがおできになる」とヨハネは厳しく迫ったのです。

10 節以下で「わたしたちはどうしたらよいですか？」と尋ねる人々に対してヨハネは特別に難しいことを要求していません。徴税人や兵士を「辞めろ」とも言ってません。誰もがやろうと思えばできること、つまり「あなたがいま神さまからいただいている仕事において、隣り人を愛するという神さまの御心にふさわしい愛を実践していきなさい」とヨハネは語りかけています。

神さまの正しさと愛に背を向けてしまっている自分を自覚して、しっかりと方向転換をし、心と体を向けて歩む。今日わたしが遣わされている場所で、神さまからいただいている仕事、与えられたチャンスを通して、隣り人を自分と同じように大切に愛するとはどういうことなのかを考え続け、行動していく。そのところにしっかりと心の羅針盤の針を合わせることできたらと思います。

主イエスはヨハネの「悔い改めのバプテスマ」に深く共感し、「自分もそのバプテスマが必要だ」と考え、ヨハネからバプテスマを受けられたのですが、私たちには不思議なことでもあります。主イエスはそれまでの18年間、ずっと神さまの御心にしっかりと羅針盤の針を合わせて歩まれたはずです。その主イエスになぜ「悔い改めのバプテスマ」が必要だったのでしょうか。「自分にはヨルダン川の水の中に深く沈められることが必要だ」と考えられた主イエスの思いをいろいろ想像する中で、一つ思い至ったのが「神はこんな石ころからでもアブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」というヨハネの言葉です。これはユダヤ人たちの「選民意識」のプライドをこなごなに砕く言葉です。なぜなら「お前たちは、ユダヤ人はすごいんだと誇っているけれど、アブラハムの子なんてこの道ばたに落ちている石ころと同じなんだよ」という意味だからです。道ばたの石ころは人に踏まれ、蹴られて当たり前。「あっ、ここに石が落ちている！すごい！」なんて誰からもけして言われぬ。けれども「その道ばたに落ちている石ころと同じ者が、神さまの愛を注がれる時、神さまの御用に用いていただけるのだ」という、徹底して神さまの前に低くされることを意味しているように思います。その意味で、主イエスは徹底して「石ころの一つになる」、そこにご自分の身を沈めることから神さまの働きに仕えていく道の一步を始めていかれたのでした。

さて私たちにはこの主イエスのように「石ころの一つ」になりきれているでしょうか。つまらないプライドにしがみついて、人と自分を比べて一喜一憂している自分。を示されるわけですが、改めて「石ころの一つ」に身を置いていかれた主イエスの、神様との深いつながりを覚えていきたいのです。